



説教要旨「神の恵みは独占禁止」

使徒言行録 13章 42～51節

パウロの語った神の恵みを告げるみ言葉は、ユダヤ人の会堂に集うユダヤ人や改宗者のみでなく、この町の多くの人々の関心を引き起こしました。ところが、最初は喜んでパウロの話聞いていたはずのユダヤ人たちが、突然手のひらを返したように口汚くののしるようになったのです。彼らの「ねたみ」は、異邦人に向けられていました。神の救いはユダヤ人だけのものだと思っていた彼らは、その救いが異邦人にまで広げられることを受け入れられなかったのです。その一方で、異邦人たちは大いに喜びました。同じイエス・キリストによる罪の赦しの福音を聞きながら、ねたみ、口汚くののしるユダヤ人たちと、喜びと賛美に満たされた異邦人たちの姿が対照的に描かれています。

かつてはパウロ自身も、イエス・キリストの福音に反発し、教会を激しく迫害した“ユダヤ人”でした。ユダヤ人としての自尊心や、律法に忠実に生きる熱心さでパウロの心は満たされていたため、イエス・キリストの福音を喜び受け入れることができなかったのです。しかし、イエス様はこのパウロの自尊心を打ち砕かれました。そこで、これまでの自分の熱心さや努力が、神に逆らうものであったことを知らされたパウロの心は空っぽになったのです。そうして空っぽになったパウロの心を、神は聖霊で満たし、キリストの救いを受け入れる者とされたのです。

自分が神に選ばれているかどうか、などと心配する必要はありません。礼拝に招かれ、聖書の言葉を聞いている。その時点で、わたしたちは恵みの導きの中にあるのです。そしてこの恵みは、だれかが独占できる物ではありません。自分たちだけで、この恵みを抱え込もうとしても、抱えきれないわけがないのです。それほどに大きな恵みです。そこでわたしたちがなすべきことは、キリストの救いの恵みを受けた隣人の存在を、ユダヤ人がしたように妬むのではなく、同じ神の恵みを喜ぶ兄弟姉妹として受け入れ、御言葉を共に喜び、共に賛美を献げ、「神の恵みの下に生き続ける」者の群れとして、共に歩いていくことなのです。